

2024 年度優秀卒業研究賞 受賞者一覧

受賞者 9 名のうち、公開許諾の得られた 8 名について以下の通り公表します。

氏名：重村 健心

指導教員：岩壁 茂

論題：セラピストの涙のプロセスに関する質的研究—対人プロセス想起法を用いて—

受賞理由：

本研究は、心理療法においてセラピストが流した涙をクライアントがどのように体験しているのか、クライアントに対するインタビューを元に検討した。経験豊富な 1 名の心理療法家に自らが涙を流した面接場面のビデオを提供してもらい、さらに 3 名のクライアントにインタビューを実施した。インタビューは、面接場面をビデオを再生して振り返ってもらう対人プロセス喚起法を用いることによって、クライアントがそのときに覚えた反応を鮮明に思い出してもらえるように工夫した。その結果、クライアントは戸惑いや驚きを感じながらも、セラピストの「一人の人間」身を感じ、面接中の感情体験を深めていくことが示された。さらにセラピストに対してもインタビューを実施し、二者の視点を比較した。高度に臨床的なトピックを取り上げるだけでなく、セラピーにおける 3 つの視点をうまく組み合わせる方法的工夫も注目に値する。考察も英語論文の先行研究の具体的な知見としっかりと照らし合わせており、その意義が高い。

氏名：松岡 楓華

指導教員：澤野 美智子

論題：現代日本の若者の恋愛観—ロマンティック・ラブ・イデオロギーが変化した後で—

受賞理由：

本研究は現代日本における愛・性・結婚の関係性について検討したものである。先行研究では、この 3 つが近代社会において一体となったこと、そのあと社会変化によって 3 者が分離したことについてはよく論じられているが、3 つが互いにどのような関係にあるのかについての議論は手薄である。本研究はその難しい領域に丁寧に取り組み、新たな知見を示すことで学術的・社会的に貢献するものである。センシティブで調査が難しいテーマであるにもかかわらず、本研究では時間と労力をかけながら様々な団体や人々に意欲的にアプローチし、貴重な深い語りデータを多く収集している。加えて、収集した膨大な語りデータを丹念かつ的確に分析したこと、多数の文献を読み込んで作成した先行研究レビューと照らし合わせながらロジカルかつ重厚な考察を述べることに成功したことも、本論文の水準を高めている。

氏名：下野 祥大

指導教員：岡本 直子

論題：両耳分離聴法の音楽聴取への応用検討

受賞理由：

本研究は「両耳分離聴法を活用した音楽聴取が与える影響と技術応用の可能性」を探るものであり、独創性と実用性を兼ね備えた優れた内容である。近年、ワイヤレスイヤホンやヘッドホンが普及する一方で、聴覚への悪影響や認知負荷が問題となっている。これに対し、本研究は右耳に言語的音声、左耳に非言語的音を提示する両耳分離聴法を提案し、その効果を科学的に検証した点が特徴である。

実験では、音声やメロディ認識の効率を評価し、聴取者の認知負荷の軽減や感情反応の向上についても分析を行っている。段階的な検証手法によりデータの信頼性が高く、実用性を見据えた成果が示されている点が高く評価できる。

本研究は、快適かつ効率的な音楽聴取の実現に寄与する基礎知見を提供しており、今後の音響技術や音楽療法分野への応用も期待される。以上より、優秀論文賞に値するものと強く推薦する。

氏名：角野 紗彩

指導教員：山本 博樹

論題：相互フィードバックがヴァイオリン演奏の技能に及ぼす影響—技能向上を目指す奏者を支援する発話—

受賞理由：

相互説明の研究は概念学習を対象としたものが圧倒的に多く、動作学習を対象としたものが少ない。この点で、ヴァイオリンの技能習得に対する相互説明の効果を検証した本研究は意義がある。ヴァイオリンの演奏経験がある32名に対して相互説明を行い、その事前と事後を比較した。参加者の音程得点、リズム得点、弾き直し回数では事前より事後で向上が見られた。そこで、各測度について事前から事後の変化量を算出し、各変化量を目的変数として、教え合い時に生じた15カテゴリーの発話を説明変数として重回帰分析を慎重に重ねた。その結果、「聴き手の動作確認」発話が音程得点とリズム得点に与える正の影響がそれぞれ有意となり、相互フィードバックがヴァイオリン演奏の技能に及ぼす影響が示された。豊富な発話データを多角的に分析し、影響過程を検証した点を特に高く評価し、本研究賞に推薦した。

氏名：濱 美乃里

指導教員：土田 宣明

論題：小・中学生期の家族内役割が青年期の過剰適応に与える影響—居場所とセルフ・コンパッションの調整効果に注目して—

受賞理由：

本論文は、小・中学生期の家族内役割と、青年期の過剰適応との関連を分析したものである。家族内役割とは、例えば、「私は、家族の世話をしていた」というような親的役割に代表される経験を指す。このようなことを経験することが、青年期の過剰適応(自分の気持ちを抑えて、環境に必要以上に合わせる状態)に影響しているのか否かをまず、量的研究法を用いて分析した(研究1)。その結果、家族内での親的役割は、過剰適応に影響している可能性のあることが分かった。ただし、セルフ・コンパッション(「あるがままの自分」を肯定的に受け入れられる心理状態のこと)が、過剰適応に大きく関与していることも推察された。研究2では、親的役割が高く、セルフ・コンパッションは低い傾向を示した者を対象に、質的研究を実施した。その結果、セルフ・コンパッションが低くても、良好な家族関係を構築できていれば、親的役割を経験しても、過剰適応を抑えられる可能性のあることが示唆された。

本論文は、量的研究(階層的重回帰分析と単純傾斜分析)と質的研究(KJ法)を組み合わせ、研究テーマを多角的に分析したものであり、他の学生の参考/見本となる論文かと思われる。

氏名：小川 凜子

指導教員：林 勇吾

論題：問題状態ボトルネックにおける手がかり提示の効果: 応答時間・精度・メンタルワークロードの測定

受賞理由：

本論文は、認知心理学の分野で議論されている「ボトルネック問題」に着目した研究であり、理論的背景から実験手法、モデリングに至るまで学術的妥当性が十分に検証されている点も高く評価できる。実験では、海外の先行研究で扱われた課題を詳細にレビューした上で、日本語版を独自にプログラミングし、新たな実験課題を開発している。さらに、心理学実験で得られたデータをもとに認知モデル(ACT-R理論)を構築し、計算機シミュレーションの手法を用いて実験結果をコンピュータ上で再現することにも成功している点は特筆に値する。心理学実験と計算機シミュレーションの両面から考察を深めていることは高度かつ重層的な取り組みであり、卒業論文として極めて優れている。以上より、本論文は複数の分野にわたる新しい知見を提示し、今後の研究や実社会の課題解決に向けて重要な指針を与えるものであると考えられ、優秀論文として強く推薦する。

氏名：山川 遥暉

指導教員：竇 雪

論題：オンラインニュースに含まれる諸要因が読者評価に与える影響—感情表現とコメント欄に着目して—

受賞理由：

インターネット上でニュースを閲覧する際、他人のコメントを目にすることが多々ある。これらのコメントは私達のニュース評価に影響を与えているが、なぜ、どのように影響するのか、その心理的プロセスについてはまだ十分に検証されていない。本研究はまさにこの心理的プロセスに着目し、バンドワゴン効果と追加情報効果という 2 つの理論を提示した上で、どちらが正しいのかを 686 名に対して行ったオンライン実験をもとに検証したものである。また、考察では、分析結果をもとに、今後のメディア報道がどうあるべきかについて論じている。

本論文の優れている点として、まず研究設問の導入過程があげられる。コメントが影響するか否かという表層的な問いではなく、その裏にある深層心理に焦点を当てた点、そして先行研究をいくつも参照しながら理論的に論じた点は特に評価できる。加えて、研究の結果を社会にどのように応用するか、しっかりと考察がなされた点も優秀である。社会的な問題を取りあげ、データを収集し分析した上で解決策を論じることは、社会心理学の研究において重要視されている。この観点から見ても、本研究は優秀であると評価できる。

氏名：杉本 峰香

指導教員：安田 裕子

論題：阪神・淡路大震災での死別経験者が PTG を獲得するプロセス

受賞理由：

本研究は、阪神・淡路大震災で身近な人との死別を経験しその後語り部として活動する 3 名にインタビューを行い、30 年に渡る心理社会的変容過程を生涯発達の視座から明らかにした。

辛酸をなめた震災経験に再接近する機会を得て語り活動を継続するなかで、新たな価値観や使命感を獲得した様相に、彼らの心的外傷後成長 (PTG) をとらえている。2024 年 1 月 1 日に発生した能登半島地震に帰省先で遭遇した著者は、知人の様々な喪失を耳にし、震災と喪失に強い関心をもった。こうした立ち位置を明らかに実施した 3 回のインタビューは、著者と研究参加者が互いの震災経験に向き合い関係性を築きながら問題意識を深化させたプロセスでもあった。

震災後の長い時間経過のなかで継承の課題が認識されるが、非被災者が震災経験をいかに解釈し意味をもたせるかに挑戦した本研究はその点でも示唆的である。異なる当事者性を重ね合わせつつ震災経験を社会に拓いていこうとするところに、本研究の真正性がとらえられる。

以上